J.クリステヴァの文学記号論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 信孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008146

J・クリステヴァの文学記号論⁽¹⁾

三浦信孝

平井啓之教授の還暦を記念して

I. intertextualité

「クリステヴァの文学記号論」という表題でお話するわけですが、限られた時間内で包括的な報告を行うのは私の力に余る仕事です。そもそも記号学については、10年以上前にロラン・バルトの *Eléments de la sémiologie* を読んだきりで、最近翻訳が出たロトマンやエーコはもとより、ムーナンやギローの入門書すら読んでおりません。肝心のクリステヴァについては、1960年代末より Tel Quel グループを代表するテキストの理論家として⁽²⁾、あるいはグループを主宰するフィリップ・ソレルスの夫人として、その令名は聞きおよんでおりましたが、実際に彼女のテキストを読んだのは今度の機会が初めてでして、私の報告はあくまで後に予定されている討議のための問題提起以上の意味はありません。

一言だけ、なぜ任にもあらず敢えてこの報告をお引受けしたかを弁明させていただきますと、私はここ1年ほどヴァレリーにおける夢の問題、私が「夢の詩学」と呼んでいるテーマについてあれこれ考えており、一方でフロイトと、他方でシュルレアリスムとまともに取組まない限り展望が開けないような問題の奥深さに手をこまねいていたところ、⁽³⁾ 昨年の夏たまたま、神戸大の枝川昌雄氏が岩波の『思想』に発表していた「クリステヴァにおける詩的言語論」(邦語文献 A7^o) を読み、啓示とっては大袈裟ですがそれに近い衝撃を受けました。ヴァレリーの夢の詩学について考える上で私がぶつかっていた難問が、クリステヴァの理論モデルによってかなり整理され、解決の糸口が示唆されるのでは、という予感をもったからです。この点については後で時間の余裕があればお話することにして、ここではともかく枝川論文、あるいは氏の一連のクリステヴァ研究・紹介の仕事を御存知ない方々にその存在をお知らせするだけで、報告者としての私の責任の大半は果されると考え、報告資料に邦語文献リストを付したようなわ

けです。

またこの資料には、クリステヴァの略年譜と彼女の理論の鍵概念と思われるものを簡単なレクシックとして試みに付しました。もちろん網羅的にして完全なものからは程遠く、あくまで仮のもので、皆さんの御批判によって修正し、より充実したものにできればと思います。

パリ第七大学のクリステヴァのゼミナールには、私の知っている範囲では、いま *Séméiotikè* の翻訳を仕上げつつある名古屋の原田邦夫氏、先ほど御紹介した神戸の枝川氏、*Polylogue* の論文数点の翻訳など（翻訳リスト参照）を通してクリステヴァ紹介にあたっている学習院の小松英輔氏などが、1970年代前半の各時期に出席しており、今回の報告の資料作成にあたってはこれらの方々の協力を得たことを一言申し述べます。ただし、鍵概念の訳語や邦語文献リストの選択に関する責任は、言うまでもなく私個人にあります。

前置きの締めくくりとして最後にもう一つ申し上げたいことがあります。私はこの2ヶ月あまりの準備期間をとおして、クリステヴァの言う *intertextualité*——あらゆるテキストはそれに先立つ、またそれと同時代の、他のテキスト群の吸収と変形として社会的に産出される、という考え方ですが——この引用の相互参照システムとしての *intertextualité* の運動を、今さらのように実感することができたということです。

それはまず、クリステヴァ自身の理論的営為そのものが、それに先行するあるいはそれと同時代の他のテキストの引用と変形による強力な *inter-texte* 的実践の模範になっていることです。構造主義の静態的分析から捨象された人間の主体性と歴史性を復権させることで構造主義の動態化をはかるクリステヴァ⁽⁴⁾は、ソレルス、バルト、デリダら「テルケル」周辺の同時代人はもとより、*Cours* と *Anagrammes* の二人のソシュール、チョムスキーの生成文法、バンヴェニストの *énonciation* の言語学、フォナギーの欲動音声学など言語学の系譜、ロシア・フォルマリズムとプラハ学派、ヤコブソン、バフチンから最近のタルトゥー学派にいたるロシア・スラブ系のポエティックと記号学の伝統、マルクス・レーニンの唯物論、ヘーゲルの否定性の弁証法、フッサール現象学、ラカンによって再読されたフロイトの精神分析、ブール、フレーゲ、ヒルベルトら集合論と記号論理学など、めざましいばかりの文献が、単なる知的好奇心や *synchrétisme* をはるかに超えた圧倒的な論理の要請から引用され、批判に晒されて、時には強引とも見える解体と統合の作業をとおして彼女の理論構築に用立てら

れるのです。それは壮大としか言いようのない知的スペクタクルの様相を呈しています。

第二に *intertextualité* は、フランス語でいう *toutes proportions gardées* の留保をつけた上でのことですが、クリステヴァを読むことによって私自身のヴァレリー読解が確実に変更を迫られるという形で現象しました。それはジュネット・トドロフ的な構造主義詩学の源流の一つに位置づけられることによって覆い隠されてきたヴァレリー詩学の存在論的背景——それも実存主義の現象学的存在論ではなく、ラカンによって鑄直された精神分析的存在論——が、クリステヴァのインパクトによってかなりはつきり見えてくるように思われたのです。⁽⁵⁾ 私はバルトまでの構造主義（あるいは構造主義までのバルト）は、ヴァレリーを読んでいる者には、分析の精緻化や衣裳の目新しさはあっても本質的なところではヴァレリーの射程に収まりうると頑迷に信じてきましたが、クリステヴァはヴァレリーを読む行為を彼女のテキストとの間で *intertexte* 化することを強い、*lecture*⁽⁶⁾ そのものに一つの認識論的断絶をもたらしかねないと思われたのです。

こうした私の印象は、ちょうど一週間まえ東京学芸大の若桑毅氏から送っていただいた論考「文学記号学のための覚え書」（文献 B12°）によって一そう確かなものになりました。というのは、若桑氏もまた、*signifiance* すなわち構造化された記号の意味作用に先立つ記号生成の原理を問うクリステヴァの仕事のインパクトのもとに、ヴァレリーの「創造詩学」⁽⁷⁾ を今日的文学記号論のコンテクストの中で読み直すことを試みているように思われたからです。

したがって、*intertextualité* の経験として第三に、ヴァレリアンとしての私にとっての若桑論文や、初めに挙げた枝川論文をはじめ直接クリステヴァを紹介する文章、あるいは彼女の理論的営為のもっとも重要な源泉であるマラルメを詳しく読んでいる友人の竹内信夫や都立大の西川直子氏のクリステヴァ読解、⁽⁸⁾ さらには今回のシンポジウムを準備する過程での丸山・佐藤両先生との対話を通して、私のなかにいわばクリステヴァ劇場とでも呼ぶべき *intertextes* の空間が徐々に形成されていったことを挙げねばなりません。

個々人の寄与と貢献は僅かなものでも、研究資料や研究成果の *mise en commun* 共同化と相互の批判的参照をとおして新しい知の *discours* の社会的生成に参加すること。テルケル・グループの *Théorie d'ensemble* がそのよき見本を示していますが、いま私にとって *intertextualité* とは、

知の私有財産性にもとづく学問の専門化， 属領化， **compartiment** 化を打ち破る原理， 昨秋来日したフェリックス・ガタリ(10)の言葉を借りるなら， **détériorisation**「非属領化」の実践だと思われま

す。交換と伝達のための記号からなる言語秩序の内部に， 記号を横断し， 記号の秩序を再配分することによって， いま一つの異質な言語の舞台を生成させるのが **texte** の運動だとするならば， **texte** すなわち **intertexte** の原理は， セクト的な学問研究の世界， あるいはわれわれの社会そのものの位階制度を横断しこれを組み換えて， そこに異質な組成（エコノミー）の共同体を作りだす社会的実践になりうるかも知れない。 **intertextualité** としてのテキスト実践 **pratique textuelle** は深いところで社会変革的実践 **pratique sociale révolutionnaire** に結びつくとするクリステヴァの主張を， われわれはそんなふう(11)に受けとめるべきではないでしょうか。

したがって， クリステヴァ派とかクリステヴァの専門家というのは言葉の矛盾なのです。幸か不幸か **Kristeva** というフランス文化にとって異質な一外国女性(11)の名前から **lacanien, barthésien** といった形容詞形を作ることは恐らくむずかしいでしょう。もちろんクリステヴァの思想を科学的に正確に把握することの重要性は言うまでもありません。しかししも， 文学前衛の **ésotérisme** 化， **fétiche** 化を厳しく戒めているクリステヴァを， 難解な言辞を弄して秘教化し物神化してこれを一部の知的エリートの私有物とするようなことがあるとしたら， それはまさしく **intertextualité** の運動を固定化し自らをタコツボ化することに他なりません。

以下で私は， 『セメイオティケー』と『詩的言語の革命』をそれぞれ三分の二ほど， それも解らないところは飛ばし飛ばし読んで理解しえた範囲のことを， 思い切って **vulgariser** してお伝えしようと思います。それは， 繰り返しますが， クリステヴァを一つの契機として， われわれ個々に文学や言語の問題を研究する主体の間にすでに始まっている運動——知の私的所有をこえた引用と相互参照の， 批判と変革の **intertexte** 的運動が， さらに大きな規模で展開されることを願ってのことです。「テキスト相互関連性」， これが私がクリステヴァから受けとった第一のメッセージです。

II. **signifiante** の記号論

クリステヴァのテキストの特徴は， 人によっては生理的拒否反応さえ惹き起しかねない， おどろおどろしいまでの特殊な **terminologie** の使用です。彼女自身， 科学的思考の革新は必然的に **terminologie** の革新を伴う

と言っていますが、*sémiologie* や *sémiotique* と言えば済むところをなぜ *sémanalyse* と言うのか、*signification* の代りになぜ *signifiante* という新語を使うのか、クリステヴァ理論の理解は、一にこうした用語革新の必然性をどこまで理解できるかにかかっています。正直に申して私には分からないことが多すぎるのですが、あえて1969年の『セメイオティケー』段階のいわば初期クリステヴァの発想を一語で要約するならば、それは *productivité* 「生産性」の概念だと思われます。

マルクスは、人間の労働を資本主義という特定の生産力／生産関係からなる社会過程のなかで捉え、ほんらい質的にして計量不可能な個々の生産的労働が、生産物の商品交換によって、貨幣という共通尺度で計測可能な量に転換されるメカニズムに注目しました。ここからマルクスは、生産物が一たび商品化されるや使用価値は交換価値に取って代られ、生産物＝商品がそれを産み出したはずの生産的労働を隠蔽すると考え、疎外された労働を資本の論理から解放するために、まさしく労働の疎外態に他ならぬ商品の流通過程を貨幣の分析を通して明らかにしたのでした。

これを記号の問題に置き換えますと、おそらくソシュールは、マルクスが経済学批判として『資本論』を構想したように、記号生産的労働の疎外態として商品化され、伝達と交換の用に供せられた記号を分析するために、言語学批判として彼の一般言語学を構想したのではないか。⁽¹²⁾

貨幣と記号——周知のようにこれは、マルクスの伝達のための日常言語と商品流通の媒介項たる貨幣とのアナロジーに触れて以来の大問題で、それがどこまで有効なアナロジーかは後で丸山先生に伺いたいところ⁽¹³⁾です。それはともかく、マルクスの場合、価値形態の外での、あるいは商品としての価値を獲得する以前の段階での生産的労働そのものは、十分に解明されたとは言いがたい。彼は労働価値を隠蔽する価値交換のメカニズムを批判的に分析することの方に精力を注いだのです。同様にソシュールも、記号体系としての *langue* という抽象を産み出す個々の具体的な言語活動に照準をあてた *parole* の言語学は、ついに構想のままに終り、ましてや記号と意味にまで分節化される以前の記号生成のメカニズムは捉えられずに終った。

一方では価値に先立つ生産的労働、他方では意味に先立つ記号生成、両者に共通するのは、生産物 *produit* の交換と伝達に先立つ *production* あるいは *productivité* の問題です。

したがって、1960年代の構造主義全盛期に知的形成をとげたクリステヴァ

アの構造主義批判は、すでに構成された構造の静態的分析をこととして、構造を産出する主体の生産的労働を捨象した点、しかもあらゆる記号生産的実践 *pratiques signifiantes* を、*langage de communication dénotative* のモデルに還元することによって、交換と伝達に先立つ意味形成の動的過程 *procès de la signifiante* を抑圧してしまった点に向けられます。こうして *produit* から *productivité* へ、記述すべき既成の *structure* から産出すべき *structuration* への視座の転換がはかられます。*langue* に働きかけて、記号とその主体が発生する以前の地点にまで生産過程を遡る志向は、古典的な消費すべき *œuvre* の概念を産出すべき *texte* のそれに置き換え、しかも現象としての *phéno-texte* を構成する記号の線的連鎖を垂直に切り開いて記号にボリュームを回復させ、そこに生成としての *géno-texte* 空間を開発します。

かくてクリステヴァは、*texte* のなかに *signifiante* 記号生成の運動を探ることによって、*signification* に先立って意味の胚珠が群れ集う薄明の地帯にまで垂鉛を下すがごとき記号学を構想し、これを *sémanalyse* と名づけます。*sémanalyse* 記号分析学とは *psychanalyse* 精神分析学からの連想による命名と思われませんが、この表現は *analyse* のギリシャ語源に立ち帰って、記号の批判・解体・死を含意します。クリステヴァの *sémanalyse* が、あらゆるタイプの *pratiques signifiantes* を *code* と *message* の *communication* モデルに還元するいわゆる *communication* の記号学への批判の上に築かれていることは言うまでもありません。

1968年にクリステヴァは書いています。「今日の記号論の問題は一に次の点にかかっている。諸々の記号論的実践を *communication* の視点から形式化する方向を押し進めるか、それとも *communication* の問題の内部に、一切の意味に先行する意味生産といういま一つの舞台を切り開くか。」ここから彼女は自らのめざす記号論を *sémiotique de la production* と呼ぶのですが、われわれは一步を進めて、彼女の *sémanalyse* を *communication* の記号学に対立させて *signifiante* の記号論と呼んで差支えないように思います。

すると直ちに浮かぶ疑問は、プリエートが *communication* の記号学に対立させて命名した *signification* の記号学⁽¹⁴⁾——すなわちバルトの『モードの体系』によって代表されるような、さまざまな文化現象が必ずしも *communication* の意図をもたずに産み出してしまう副次的・間接的意

(15)
味作用を分析する *connotation* の記号学と、クリステヴァの *signifiante* の記号論はどこが違うのか、という疑問です。

これについては『セメイオティケー』のなかで『モードの体系』を論じた一篇「意味とモード」を精読しなければ、クリステヴァの立場を明確につかむことはできません。ただ、ここで私の仮説を述べておきますと、バルトは、記号学が言語学を包摂するだろうとのソシュールの展望を逆転させて、記号学の方が言語学の一部をなすと主張したわけです。つまりバルトは、まさしく記号と交換の原理にもとづく西洋消費社会が生産したモードという商品のイデオロギーを、他ならぬ記号交換の原理にもとづく言語学をモデルとした記号論的装置を使って暴いたのではないか。

こうしたバルトの、制度のなかに入りこんで制度を暴く両義的できわめて危い足取りは、先ほどの佐藤先生の報告からも窺われるように、バルトの叡智をもってのみ可能だったと言えますが、少なくともクリステヴァは、*dénotation* 的伝達言語とは別の組成の言語的实践を模索しつつも、バルトがイエルムスレウを援用して *signifiant/signifié* の階層化により定義した *connotation* にはほとんど関心を示しません。それは結局 *connotation* が、*communication dénotative* から二次的に派生したものとして、*signifiant/signifié* の記号原理の階層化によって説明されるからであり、クリステヴァは、いわば *connotation* のよって来たる所以を言語学モデルに依拠することなく、言語学とは異質の論理によって解明しようとするからだと考えられます。

クリステヴァの *signifiante* の記号論は、*sémanalyse* すなわち記号原理そのものの批判・解体から出発するものであり、したがってそれは、一見逆説的に響くかも知れませんが、いわばソシュールの定式に忠実に、言語学をその一部として包摂するような記号論、したがって言語学モデルには還元され得ない *translinguistique* 超言語学的な記号論⁽¹⁶⁾なのです。

ポエティックや文体論の領域でも従来、詩的言語を *communication* 言語の規範的コードからの逸脱・偏差 *déviaton・écart* として説明するのが通例でしたが、クリステヴァはこうした構造主義詩学における *poétique* の *linguistique* への従属を逆転させ、詩的言語をもって、*communication* の言語をその一特殊例として含むようなコードの潜在的無限性として捉えます。すなわち詩的言語を日常言語のサブコードと考えるのではなく、逆に日常言語を詩的言語の部分集合と見なすのです。そして同一律・矛盾律のアリストテレス的論理から見れば非合理的であり、主述定立

prédication を支える線的時間秩序から見れば無時間的な矛盾のカオスとして映る詩的言語の *infinité potentielle* から、communication の言語がいかにして生成していくか、さらに言えば、詩的言語が孕む *infinité potentielle* の重層的空間が、いかなるメカニズムによって langage dénotatif の一義的線状性へと還元されるのかを明らかにしようとするのです。

こうしてクリステヴァは、記号論を communication システムとしての言語学モデルから解放し、非-伝達的かつコードの非-一義的 *pratiques signifiantes* の類型論を打立て、かくて古典的記号学の限界の彼方まで記号論の枠を拡大するために、詩的言語の否定性と超論理性をその戦略目標の中心に据えるのです。詩的言語の否定性と超論理性、それこそまさしくソシュールが発見したアナグラムの論理に他なりません。

丸山先生の報告にすでに詳しく、ここで不正確な繰り返しは避けようと思いますが、ソシュールは、サトゥルヌス詩やヴェーダのなかに鍵となる固有名詞が散種されていて、これを言葉の下に隠された言葉 *les mots sous les mots* (文献 B14° 参照) として解読できる事実を発見したのでした。そしてクリステヴァはアナグラムの現象のうちに、記号を横断し記号を組み換え再配分することによって言語の中に別の言語組成を産み出すテキスト生成の一般的原理を見出し、ソシュール(17)にならってこれをパラグラムと名づけます。

arbitraire du signe を中心概念として構築されたソシュール言語学において、*signifiant/signifié* の垂直分割と記号の線的配列は二つの根本命題でしたが、パラグラムはその二つの原理をいともたやすく破壊して、ポリフォニーとポリセミーの中心なき複数性の空間を生成させます。こうしてパラグラムが *signe* の位階秩序を侵犯するものである以上、*signe* を対象とする *linguistique* ではなく *signe* 原理を超えた *translinguistique* の視点に立たぬ限り、パラグラムの運動法則は理解しえないでしょう。すなわちパラグラムは *communication* や *signification* の領域にではなく、まさしく *signifiante* の領域に属すものなのです。

しかし『セメイオティケー』段階のクリステヴァは、パラグラムに見られる詩的論理の否定性・侵犯性を集合論から発した数学の公理主義 *axiomatique* の方法で形式化してみせるにとどまり、*signifiante* のメカニズムの本格的解明には至らなかったと言っていると思います。マルクスとソシュールが放棄した、と言っていなければならない充分解明できなかった記号生

成のメカニズム——クリステヴァはそのモデルをフロイトが明らかにした夢の論理, *condensation* と *déplacement* 圧縮と移動によって夢の潜在思想を顕在内容に形象化する夢の作業 *Traumarbeit* のうちに予見していただけです。

ソシュールがアナグラム研究で挫折したのは、彼がアナグラムを言語のなかの無意識として捉えることができず、これをあくまで詩人の意識的作業の産物として位置づけようとしたからだ、——クリステヴァはそんなふうに考えるでしょう。すなわち彼女は、意味に先立つ記号生成 *signifiante* を、主体が定立される以前の無意識的欲動の基層に結びつけて理論化しようとするのです。

III. le sémiotique と le symbolique

1969年の『セメイオティケー』と1974年の『詩的言語の革命』のあいだには、*signifiante* 理論の深化という一貫した連続性がありますが、そこに断絶があるとすれば、それはフロイトの欲動理論とラカンによる主体理論、要するに精神分析学の決定的な導入をあげねばなりません。

クリステヴァは国家博士論文『詩的言語の革命』の第一部第一章から *le sémiotique* と *le symbolique* の弁証法モデルを展開します。こうした二層性として意味形成性の過程を捉える発想には、明らかにバンヴェニストの *le sémiotique* と *le sémantique* のいわゆる *double signifiante* の影響が見られます。⁽¹⁸⁾

バンヴェニストにあって *le sémiotique* とは、言語記号に固有の意味形成性の様態であり、乱暴に言えばソシュールにおける *systeme de signes* としての（あるいは単なるレクシックとしての）*langue* にほぼ同一視できるものです。他方 *le sémantique* とは、形態的記号を有機的に結合して意味ある文を作り出す *discours* と *énonciation* に固有の意味形成性の様態です。これも乱暴に言って、ソシュールにおける *langue* の個的使用たる *parole* とほぼ同一視していいでしょう。*énonciation* による意味創出たる *le sémantique* が、合理的な個として定立された語る主体 *sujet parlant* を前提にして初めて成り立つことは、言うまでもありません。

バンヴェニストの *le sémiotique/le sémantique* がソシュールの *langue/parole* と同じ内容なら、何もこと改めて新しい用語を案出する必要もなさそうなものですが、ソシュール言語学が語る主体を前提しつつも

parole を一応囲い込んだ langue の言語学として成立したのに対し、バンヴェニストは langue を行使して意味を生産する言語主体に照準をあてた discours の言語学へと重心を移動させ、かつソシユールによって記号秩序から捨象された言語外の指示対象 référent を、言表行為を成り立たせる伝達状況への référence という形で復活させ、閉ざされた記号を言語外の現実へと開こうとする意図があつたことだと考えられます。

ところがクリステヴァは、ソシユールの sujet parlant はもちろんのことバンヴェニストの sujet de l'énonciation までも、それが個的意識として定立され、主語 - 述語の統合によって文を構成する合理的主体である限りにおいて、これをデカルト的コギトあるいはフッサールの超越論的自我と同じエピステーメに属すものと断定します。すなわち構造主義言語学の基底には、現象学で言う意識の定立性 le thétique⁽¹⁹⁾ が横たわっている。

こうしてクリステヴァは、記号の体系としての langue と langue の意味論化たる énonciation を含む記号象徴の秩序を le symbolique と名づけます。そして論理的かつ時間的に le symbolique に先立ち、かつ共時的にこれを可能ならしめている le symbolique の基層——すなわち主体が記号と同時的かつ相即的に定立される以前の記号生成の運動、無意識と欲動的身体に結びついた原記号の germination を le sémiotique と名づけるのです。

ここには驚くべき用語の濫用、と言っていなければ用語法の転換があります。すなわち、バンヴェニストがソシユールの langue を le sémiotique と言いかえたとき、そこには système de signes arbitraires たる langue の言語学をモデルとして構築されてきた記号学の伝統が集約されています。ところがクリステヴァはこの常識をくつがえし、sémiotique という用語そのものを communication の構造ではなく signifiante の構造化作用の方に、あるいは合理的主体ではなく無意識の主体の側に奪い取ってしまったこととなります。これがクリステヴァの signifiante の記号論の論理的帰結でなくて何でしょう。山口昌雄氏の伝えるところによれば(文献A11^o)、こうしたクリステヴァの用語の濫用にトドロフはあからさまな不快感を示したとのことですが、いまや構造主義詩学の枠内で分類整理をこととするトドロフのような学者の眉をひそめさせたことは、逆にクリステヴァの構造主義乗り越えの戦略が功を奏した証明だとも考えられるのです。

ところで、初期クリステヴァの phéno-texte/géno-texte の理論的延長

線上に位置づけられるこの *le symbolique/le sémiotique*, 構造と反構造の動態モデルは, 同時代的な知の枠組みを広く取れば, 山口昌男氏の中心と周縁あるいは中村雄二郎氏の制度と情念にも通底するパラダイムだと思われ(20)ますが, その最大の特徴は, *le symbolique* の命名がラカンの「象徴界 *le Symbolique*」に由来していることから明らかなように, 精神分析学からの影響を深く刻印されていることです。

細かいニュアンスは除いて図式化してしまうならば, 記号象徴秩序 *le symbolique* は *fonction paternelle* 父性原理によって支配される社会制度と超自我に結びつきますし, 原記号作用たる *le sémiotique* はフロイトの *Es*, 無意識的欲動すなわち母の身体に根ざしています。クリステヴァは, この原記号作用のもっとも深い動因をなす欲動場を, プラトンの『ティマイオス』から *chora* なる語を借り受けて *chora sémiotique* 原記号コーラと名づけます。この *chora* は女性名詞で, *chora pulsionnelle* とも *chora maternelle* とも言いかえられていますから, 結局クリステヴァは「原記号コーラ」なる概念によって, 記号生成の運動を, 既成の言語表象秩序によっては *représenter* できない母なる欲動の *hétérogène* な基層に結びつけた, ということになります。

さて, 意味と交換に先立つ記号生成をいう *signifiante* は, こうして *le sémiotique* から *le symbolique* への動的な移行過程として捉えられるわけですが, クリステヴァはこの移行過程を, 一方では現象学的意識の定立性 *le thétique* として, 他方では精神分析的欲動の否定性 *la négativité* によって, いわば同じプロセスを表と裏から解析しようとしています。

le sémiotique から *le symbolique* への移行による主体の定立と象徴機能の獲得は, 6ヶ月から18ヶ月の幼児 (*infans* 「言葉を話さぬ者」) が通過するラカンのいわゆる「鏡像段階」で準備され, 去勢 *castration* の発見によって完成される, とクリステヴァは考えます。しかし彼女の独創は, 記号象徴秩序の成立を, フロイトが『快感原則の彼岸』冒頭で描写した幼児の糸巻き遊び *Fort-Da* のエピソードと, 同じくフロイトが注目しラカンが読解を深めた *Verneinung-dénégation* 「否定」の論理から導き出した点にあるようです。この辺の *la négativité-rejet* を扱った『詩的言語の革命』第一部第二章 (文献 A14° 参照) が, *le sémiotique* と *le symbolique* の弁証法を理解する鍵であり, 私のように精神分析に疎い者にはもっとも難解な部分なのですが, ここではごく大ざっぱな筋のみをお話するにとどめます。

糸巻き遊びのエピソードとは、フロイトが18カ月の男の子——18カ月ですからラカンの鏡像段階の仕上げの時期に対応します——18カ月の幼児が繰り返す奇妙な遊びを観察して記述したものです。両親の愛情のもとで順調に育った1歳半のその男の子は、ときどき糸巻きをベッドの隅に投げつけては満足げにオーオーオーと声をあげ——この声は両親によれば Fort! (フランス語の loin! parti!) を意味します——今度はその糸巻きを引き出しては Da! (フランス語の Voilà!) と声をあげる一種の「いいいいないばあ」遊びなのですが、この Fort-Da は実は母親の外出による消滅と帰宅による再登場を、糸巻きというその幼児にとって最初の *symbole* の存在と不在、消滅とその再出現によって、いわば象徴レベルに置き換える仕種だったのです。

フロイト自身さまざまな解釈可能性のあいだでその意味を解きあぐねているかのように見えるこの Fort-Da 遊びのうちに、おそらくクリステヴァは、糸巻きを放り出す——すなわち自分にとっての快楽であるはずの母親の身体を反覆強迫的に放り出すことによって、現実の *corps maternel* から離脱し、*symbolique* な秩序のなかに自己を定立する否定的な欲動の働きを見て取るのです。

こうした糸巻き遊びの分析から、*le sémiotique* の生物的自然を *le symbolique* の文化的象徴秩序へと乗り超える定立性のメカニズムは、無意識に固有の否定性あるいは *rejet pulsionel* 欲動的放擲という概念で定式化されます。クリステヴァがドイツ語の *verwerfung* の訳語としてあてた *rejet* が、糸巻きを *rejeter* 放り投げる動作に由来することは、ほぼ間違いないでしょう。⁽²¹⁾

いま一つの *Verneinung* フランス語では (dé)négation と訳されている「否定」の方については、「私はあなたを憎んではいません」と言うことが、実は「私はあなたを憎んでいる」ことを部分的に認知することにつながるということで、それはある否定命題を言表するためには肯定命題を立てた上でそれを否定しなければならないからだと思われまます。つまり否定的言表をとおして、それまで抑圧されていた欲動は部分的に言語表象のレベルに移行される、しかし抑圧のメカニズムそのものは全部取払われることなく相変らず働きつづける。その結果、抑圧されて残った欲動はのちに再び言語表象秩序のなかに還流する機会を絶えずうかがうことになる。⁽²²⁾

以上、糸巻き遊び Fort-Da と否定 *Verneinung* の考察から、原記号欲動 *le sémiotique* を抑圧ないし切断して定立される記号象徴秩序 *le*

symbolique はたえざる le sémiotique の噴出・還流の可能性によって脅やかされるという定立性と否定性の、禁止と侵犯の動態的過程が素描されます。signifiante の過程にある主体は、したがって le sémiotique と le symbolique の間の弁証法的過程におかれた主体——母なるコーラに一体化すれば父権からの去勢不安によって脅やかされ、逆に象徴秩序のなかに自分を囲い込もうとすると原記号欲動の壊乱によって虚構の自己同一性がくつがえされる、いわば「告発された主体」*sujet en procès* になるのです。

初期クリステヴァがバフチンのドストエフスキー論から借り受けた *monologisme/dialogisme* の概念も、ここまで見てくればはっきりします。le symbolique の制度のなかに閉じこもり、語る主体の同一性を信じて疑わず、超越論的シニフィエ(デリダ)すなわち一神教 *monothéisme* の神学的位階秩序の保証のもとに再現代行表象的な *discours* をつむぐ *monologue* に対して、同一者と他者の、意識と無意識の、定立性と否定性の、一言にして le symbolique と le sémiotique の二重化された舞台の上で、止揚されることなき矛盾の弁証法としてつむがれる *dialogue*。詩的言語がパラグラム原理によって産出される言語のなかの異質な一言語、すなわち *dialogue paragrammatique* であることは、言うまでもないでしょう。

最後に忘れず指摘しなければならないのは、クリステヴァが、否定性がなければ定立性は生成しないが、逆に定立性がなければ否定性は機能しえないとして、le symbolique を支える定立性 le thétique の契機を繰り返し強調していることです。le sémiotique すなわち制度にとっては異質な矛盾の混沌を抑圧して le thétique の均質な秩序の強化に血道をあげるのはパラノイアだが、逆に le symbolique の定立性を一切否定して、le sémiotique との不可能な一体化へと自らを閉じ込めるのは *asymbolie* 象徴不能症と *psychose* 精神病に至る道だ、とクリステヴァは言うのです。精神分析的治療の実践に踏み込んだと伝えられる彼女は、「私は le symbolique の側に立つ」という意味深い発言をしています。

重要なことは、le sémiotique の *hétérogène* なエネルギーを圧窄することなく、これを le symbolique の秩序に疎通させるような回路を可能にする記号論的装置を構築していくことだ。クリステヴァのテキスト概念は、『詩的言語の革命』にいたって、こうした意味あいにおける記号論的装置 *dispositif sémiotique* の概念へと転換されていくようです。そこに

は、そもそもテキスト実践を社会変革的実践の原理に据えようとした彼女の志向が貫ぬかれています。

le *thétique* の契機の重視、これを文学記号論のレベルで言うならば、詩的言語の主体は精神分析が対象とする無意識の主体そのものではない、という揚言となって現われます。ヴァレリーは、「*poésie* しか含まない *poème* を作ることはできない」と言いました。詩的言語の否定性は、マラルメの言う *Syntaxe* という最終的保障なしには空転するだけです。詩的言語といえども、文の統辞法を支配する主述定立 *prédication* の保障を必要とする。ただ、その *syntaxe* の合理的秩序は原記号欲動の否定的作用によって *pulvériser* 粉砕されているのです。

さて、ここまで見てきたとき、詩的言語の否定性によって *communication* の記号学の無効あるいは限界を暴き立て、超論理的・超言語学的な *signifiante* のメカニズムを解明してきたクリステヴァの仕事は、いくらその範囲を拡大したところで、記号学と呼ばれる *science* の枠に収まりきるものでしょうか？ 記号学とは危機の科学であり科学の批判であるとして、記号論が記号論の批判としてしか成立しないという命題をその出発点で自らに課したクリステヴァの記号論は、一体どのような地点にまで突き進むのか？ やっと40歳を迎えたばかりのこの *problématique* な一外国人女性の雄渾とも言える理論的営為を、われわれは注意深く見つめていく必要があると思われま

IV. Valéry の夢の詩学と Kristeva

ヴァレリーの『カイエ』、特にその主題別アンソロジーが *Pléiade* 版で出て (1973, 1974) 以来、ヴァレリーにおける夢の問題の重要性が大きく浮かび上がってきました。彼の夢理論が今日的射程をもちうるのは、彼が夢を生理学や心理学の問題としてではなく、まさに言語表現の可能性とのかわり⁽²³⁾ で捉えようとしたからです。ここでその大要を整理するならば、次の二つのテーゼにまとめることができると思われます。

まず第一に、「私は夢を見ている」と言うことはできない。C'est une erreur de dire: Je rêve. なぜなら夢みている私とは一個の「他者」であり、定立的意識が生ずる以前の前人称的主体 *on* であって、「私は夢みている」と言いうる私、*énonciation* の主体としての私 *je* が成立するとき、夢の主体はすでに消滅しているはずだ。「夢とは言語以前の現象」であり、「夢みるという動詞 *rêver* は現在形をもたない」というわけです。これを

要するに、夢の主体 *on* は言表行為の主体 *je* たり得ない。これがヴァレリーの夢に関する第一テーゼです。ここから、定立的意識による検閲を能う限り排して、*discours* の主体を夢と無意識の主体に直接無媒介的に重ね合わせようとするシュルレアリスムの *écriture automatique* と、ヴァレリーの立場とは、理論的に真っ向から対立することになります。

ところが他方でヴァレリーは、夢を覚醒時の言語とは異質なもう一つの言語とみなして、これを「象形文字」「文字謎」などたまたまフロイトと同じ言葉で呼び、さらには夢の形象を修辭学的比喩形象として把握する可能性を示唆します。また夢における同一律や矛盾律の不在、時間的空間的参照軸の崩壊⁽²⁴⁾、*signifiant/signifié* に分裂する以前の夢の記号の形態性 *le formel* と意味性 *le significatif* の一致などを挙げて、夢と詩的空間の同質性と相似を指摘します。

覚醒時の *discours* が、*langue* の形態的要素である *signes* を *syntagme* の水平軸に有機的に結合して有意味的な文 *phrase* を創出する行為であるとするならば、夢の中では *phrase* や *proposition* をつくる *syntagmatique* な述語づけの機能が失われている。つまり夢の言語は、ヤコブソンのいう「隣接性の障害」に冒されていて、そこでは一瞬一瞬、継起的秩序の外で語の置換的集合がつくられては消える。夢の言語とは、*syntagme* へと統合されることのない *paradigme* の隠喩的な連鎖だ、というわけです。一言にして、夢＝メタフォール＝詩、これがヴァレリーの夢理論の第二テーゼであり、ここからヴァレリーは、精神分析による夢解釈という意味論的アプローチとは別様に、いわば夢の形態的記号論を模索する。すなわち *psychanalyse* に対して、夢を言語的に合成 *synthèse* する「夢の詩学」を構想するのです。

ここでヴァレリーの *Poétique* が、詩句の組立てに関する規則や約束事の集大成、あるいはいわゆる作詩法を指すものではなく、ポイエンのギリシャ語源「つくる」にもとづいて *Poïétique* すなわち言語による生産の理論をめざすものだったことを思い出しておくのは無駄ではないでしょう。先ほど述べたように、クリステヴァの記号論が *production* あるいは *productivité* の記号論だったからです。

夢を解釈するのではなく夢をつくること。しかし夢をつくるとは、自分がみた夢を言葉で語ることはありません。仮にそれが詩的言語であれ、言葉による表現行為である以上、そこに *discours* の主体を前提にせざるを得ない。そして覚醒時の意識が、ほんらい言語以前の現象である夢を言

語によって物語るとき、非ユークリッド的夢の文法は、ディスクールが必然的に内含する合理的 *syntaxe* によって破壊されてしまう。夢の記号は、伝達のための日常言語とは本質的に異なるもう一つの言語、ヴァレリーが「言語の中の一言語」と呼んだ詩的言語によってしか転位されない。ここで重要なことは、夢は詩に似ている、しかし夢がそのまま詩なのではない、という点です。では一体いかなるメカニズムによって、夢の記号は詩的言語へと転換されるのか？ 夢を詩的言語に転換する主体は、夢の意識そのものでも覚醒時の定立的意識でもないとするれば、それは一体どのような主体なのか？

ここまで考えて暗礁に乗りあげていた私の前にきわめて有力な理論モデルとして現われたのが、クリステヴァの *le sémiotique* と *le symbolique* の弁証法だったのです。ここではこれ以上の展開はむずかしいので、私がヴァレリーの夢の詩学のもっとも重要な実験だと考えている *La Jeune Parque* を例にして簡単な展望を試みたいと思います。

すでに見たように、*le symbolique* とは記号体系としての *langue* と、語る主体による *langue* の意味論化たる *énonciation* をともを含む記号象徴の秩序であり、*le sémiotique* とは、言語表象秩序に先立つ、無意識と欲動的身体に根ざした原記号作用の動因のことでした。そして父なる制度としての *le symbolique* は母なる *le sémiotique* の欲動を抑圧し切断することによって成立し、*le sémiotique* のうち *le symbolique* のうちに取り込まれずに抑圧されて残った部分は、象徴秩序のなかに定立された主体を下部から脅やかし、記号の象徴秩序の領域を侵犯しようとしています。

ところで *le symbolique* を支えるのは合理的な定立的意識であり、*le sémiotique* は前-記号象徴的な、一切の分節化に先立つ混沌のことですから、これらをそれぞれ先程のヴァレリーにおける覚醒時の主体 *je* と夢の前人称的主体 *on*（あるいは覚醒時の有意味的 *discours* と、意味につながらない夢の記号⁽²⁵⁾）に置き換えることが許されるならば、*Jeune Parque* の眼覚めとは、「蛇」によって形象化される *le sémiotique* すなわち闇＝大地＝母＝欲動を抑圧し切断して「太陽」の父なる光の秩序に同一化することにより、虚構としての自我を *le symbolique* の領界に定立するまでの「鏡像段階」のドラマとして読み解けるのではないか？

パルクの肉体に深い噛み傷を残して「秘かなる官能の妹」を眼覚めさせた蛇は、意識を回復した「注意力の姉」によって追放されます。しかしこ

うして抑圧された原記号的欲動は、詩篇の後半で火と燃える官能の門口にとぐろを巻く蛇として、言語象徴秩序の表層に噴出してくるのです (retour du refoulé)。

もう一つ大事なことがあります。 *La Jeune Parque* 512行のモノローグを開始する最初の問い *Qui pleure là?* は、眠りの底で母の身体と一体化していたアモルフなマグマ状の主体に生じた最初の亀裂であり、自己の内部で語る名づけ得ぬ者の声を聴いたパルクが、自己を自己として同一化できぬままに発した問いかけです。そこには、ヴァレリーが *dialogue intérieur* 「内的対話」と呼んで考察した問題、すなわち同一者の中に他者を設定する対話的⁽²⁶⁾二重化の論理が働いているのです。つまり *Qui pleure là?* という問いは、「そこで泣いている誰か」と「そこで泣いているのは誰?」と問う者の間に、あるいはクリステヴァ風に言って *sujet de l'énoncé* と *sujet de l'énonciation* の間に修復不能の差異を生ぜしめ、『若きパルク』の *monologue* 全体を *Je* と *Qui?* の *dialogue* として産出するジェネレーターの役割を果たします。そしてこの *monodialogue* (ヴァレリーの表現)の主体とは、同一者でも他者でもなく、蛇と太陽のあいだに引き裂かれた「同一者の中の他者」、ふたたびクリステヴァ流に言うならば、*le symbolique* と *le sémiotique* の弁証法的過程に置かれた *sujet en procès* なのです。

ヴァレリーの「内的対話」は、一個の言語主体を *parleur* と *écouteur* の分割と統合、すなわち一なる二、二なる一として捉える主体の構造論であるのみならず、言語主体の成立と象徴機能の獲得が、ともに存在の中の不在を契機とし同一者の中の他者を媒介にするという発生論 *le génétique* を包摂するものでした。別の言い方をすれば、ヴァレリーの「内的対話」は、その完成された水平軸においては、バンヴェニスト流の *je* と *tu* の、*locuteur* と *interlocuteur* の間に交される *énonciation* の対話構造に発展する祖型であり、その垂直軸においては、語る主体のコギト的一者性を破壊して、定立的意識を、内部で語る他者の声の聴き手の位置にまで還元してしまうという、フロイト的意識と無意識の対話構造に結びつきます。

クリステヴァにおける *dialogue* 概念が、テキストを社会的歴史的コンテキストに結びつけるバフチーンの対話法から展開されたものであり、それに比べてヴァレリーの内的対話は個人の内部の心理学に傾斜していることは否めませんが、両者がともに語る主体の *monologisme* に対し発話の

起源の否定をつきつけたことは、見逃せない点だと思われます。

このほか、詩的 discours をつらぬいて言語の中にもう一つ別の言語組織を生成させる paragrammatisme の運動も、『若きパルク』のうちにその典型的な例を見出すことができます。冒頭のセカンスで、自分を犯した蛇を意識レベルでは身うちから追放するパルクが、言語の多重決定性を通して彼女自身蛇に変身してしまうこと。maternité を拒否して涙するパルクを描いた「涙」のセカンスで、魂の奥の闇から生まれる涙の発出が、テキストの深層レベルではそのまま出産のイメージに重なってしまうこと。これは報告の中で簡単に触れた Verneinung, すなわち non が oui を言う (dé)negation の格好の illustrations なのですが、こうしたテキストの中のテキスト、二重性としてのテキスト産出の運動が、まさに signifiants の surdétermination にもとづく多層性（ポリフォニーとポリセミー）によって実現されている。これは言葉の下に別な言葉を書きこんでいく paragramme の働きによるものなのですが、その証明には詳しいテキスト分析が必要ですので、それは別の機会に譲りたいと思います。

註

(1) 1981年3月24日、国学院大学で行われた日本フランス語フランス文学会関東支部主催のシンポジウム《記号学の行方——ソシュール・バルト・クリステヴァ》における口頭発表草稿。報告は、

I. intertextualité

II. signifiante の記号論

III. le sémiotique と le symbolique

IV. Valéry の夢の詩学と Kristeva

という章立てで準備されたが、当日は時間的制約から I と IV を割愛し、II と III のみを報告した。また、福井芳男氏の司会で行われたシンポジウムのプログラムは以下の通り。

A. 問題提起

1. 〈ソシュールの記号学と神話・アナグラム研究〉丸山圭三郎（中央大学）

2. 〈ロラン・バルトと記号学〉佐藤信夫（国学院大学）

3. 〈クリステヴァの文学記号論〉三浦信孝（静岡大学）

B. 討論

(2) 菅野昭正、文献 B1°, 2° を参照。

(3) 日本フランス語フランス文学会1980年春季大会における口頭発表「ヴァレリーにおける眠りと眼覚めのテーマ」を発展させた拙論：“Sommeil et Réveil chez Valéry—D'Agathe à La Jeune Parque”, in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, n° 38, Hakusuisha, mars 1981 を参照。

- (4) 構造主義に対する自分のこうした位置取りを、クリステヴァは、1920年代のロシア・フォルマリズムに対するバフチンのそれに重ね合わせていると思われる。
- (5) こうしたヴァレリー読解の転換と深化は、Gérard Genette, “Valéry et axiomatique littéraire”, in *Tel Quel*, n° 20, 1966 (*Figures*, Seuil, 1967 に再録) と Jacques Derrida, “Qual Quelle—sources de Valéry”, in *M. L. N.*, mai 1972 (*Marges de la philosophie*, Minuit, 1972 に再録) をへだてる距離のうちに最もよく現れている。なおクリステヴァ自身にとってヴァレリーは、マラルメによる「詩的言語の革命」をアカデミズムの方向に引戻した *néo-classicisme* 的的反動を体现する存在である。これが「アンチ・ヴァレリアンの系譜」において言わばステレオタイプした見方であることについては、筑摩版ヴァレリー全集補巻1月報拙稿を参照。クリステヴァがヴァレリーをよく読んだ形跡は見あたらず、こうしたヴァレリー観をそのまま鵜呑みにして受け売りする論者があとを絶たぬのは残念なことである（例えば宇波彰の文献A4°）。
- (6) この印象は1974年の『詩的言語の革命』からのもので、1969年の『セメイオティケー』における詩的言語論は、概念装置の精緻化を除けば、現実の言語創造行為の観察から生まれたヴァレリー詩学を超えるものではない。「認識論的断絶」とやや大袈裟に述べたのは、例えばヴァレリーの身体論を扱った拙稿「苦痛の幾何学と身体思想」（筑摩版ヴァレリー全集カイエ篇第4巻月報）が、コギトの定立性の根拠として身体を現象学的に記述するのに終始して、ヴァレリーにおける自己同一性解体の契機としての情動的身体の問題、とりわけ詩的言語の生成に参加する欲動的身体の機能に十分注意を払わないか全然無視してしまったことの反省にもとづく。
- (7) 若桑氏によるもので、ヴァレリー詩学が *Poïétique* 「詩的生産の理論」として構想されていたことをふまえた表現と思われる。
- (8) 竹内の文献 B10° 冒頭の三頁は、反構造主義的な新しい弁証法詩学のマニフェストとも呼ぶべき文章であり、そこで竹内はマラルメ・ヴァレリーの徴の下にクリステヴァとメシヨニックの理論的営為を位置づける史的展望を提出している。いわば別の道をたどって同一の方向をめざしているらしいメシヨニックによるクリステヴァ批判についても、同様に竹内の文献 B11° を参照。
- (9) ともすれば詩的言語の否定性・侵犯性のみが誇張される傾向に抗して、『詩的言語の革命』でクリステヴァが強調している *le thétique* 「定立性」（後述）の契機の重要性を、西川論文（文献A13°）は正しく指摘している。またクリステヴァの *texte* や *signifiante* 概念とデリダの *écriture* や *différance* 概念の比較可能性を示唆していることも、西川氏のメリットと思われる。なお、西川直子、足立和浩、沢崎浩平氏ら都立大グループが *Polylogue* の翻訳（白水社刊）にあたられていると聞いた。
- (10) クリステヴァの共著の一つに *La traversée des signes* がある。Chronologie 参照。
- (11) いま記憶が定かでないが、クリステヴァの仕事に助言を与え、また逆に彼女か

らのインパクトを一つの契機として変貌をとげていったロラン・バルトは、テキストの理論家クリステヴァの登場を紹介する文章を“L'Etrangère”と題していたはずである。

- (12) これは柄谷行人氏の視点であるが、クリステヴァにも共通すると考えていい。
- (13) 丸山圭三郎「貨幣と言記記号のアナロジー」、『現代思想』1977年11月号を参照。
- (14) この対立をふまえて記号学の可能性を展望した佐藤信夫「記号学とレトリック」、『現代思想』1976年10月号を参照。
- (15) 「connotation の記号学」なる呼称が、*Pratique et pertinence*, Minuit, 1975 のプリエートによっても行われていることを発表ののち知った。
- (16) *translinguistique* を「超言語学」と訳すのには実は問題がある。この接頭辞 *trans* には「超えて」よりも *transatlantique* などに見られる「横切って」の意が強い。言語学的秩序を全否定してこれを乗り越えるのではなく、「言語記号の恣意性」と「*signifiant* の線状性」を原理とする言語学的秩序を横断し、これを組み換え再配分することによって、そこに異質なもう一つの言語の舞台を開くこと、これが *translinguistique* のモチーフだからである。
- (17) *paragramme* の接頭辞 *para-* は、*parachute*, *parasol* に見られる「に対する防御」の意ではなく、à côté de「の傍らに、側に、に並んで」の原義から、化学で言う「副、異性体」、病理学で言う「擬似」などの意を含むと考えられる。すなわち、本来書かれてそこにある *gramme* の傍らにパラレルに、似て非なる異性体として、副次的な別の *gramme* を産み出す二重のテキストの生成原理。
- (18) ついでにつけ加えるならば、クリステヴァの好んで使う *procès* なる用語も、*procès de l'énonciation*（言表行為の動的過程）という形でバンヴェニストがよく使っていた言葉である。
- (19) ソシユール言語学がフッサール現象学を認識論的基盤にしていることは、つとにヤコブソンが洞察していたが、最近の実証的研究によって立証されつつあるという。田島節夫「現象学と構造主義」、『講座現象学3』、弘文堂、1980を参照。
- (20) 特にクリステヴァと山口昌男については、文献A6°、B7°を参照。
- (21) ラカンの有名な *forclusion* 排除は、同じ *Verwerfung* の訳語であるが、この訳語の根拠とその意味の射程は私には不明である。ただ少なくとも *Verwerfung-rejet* の日本語訳としては、小松英輔氏の試みた「拒絶」よりは「放擲」の方がよりふさわしいと考える。また、同じ『快感原則の彼岸』の糸巻き遊びは、早くは Sarah Kofman の *L'enfance de l'art*, Payot, 1970 で無意識的幻想と芸術創造の関係解明の重要な契機として取り上げられ、最近では J. Derrida の近著 *La Carte postale* の重要部分はその読解にあてられているという。豊崎光一「ファミリー・ロマンス」、『海』1981年3月号を参照。
- (22) 糸巻き遊びと特に「否定」については、拙稿 A17° でややくわしく補っていた。
- (23) 「眠りとめざめ、意識と無意識の問題を、言語による表現行為との関連において考究し続けたヴァレリーの考察は、象徴主義文学、とりわけマラルメとランボオの達成を、〔シュルレアリスム以降の〕のちの世代に引きつぐための、一本の

きわどい 通路になったはず」のものであった。(安藤元雄「過激な内的対話」、『朝日ジャーナル』1980年10月10日号)

- (24) 夢の中では、バンヴェニストが discours の審級の基本的座標軸と考えた moi-ici-maintenant は成立しない。
- (25) ヴァレリーにはフロイトの欲動理論が欠落しており、したがってこのパラレリズムには重要な留保を付しておく必要がある。
- (26) ヴァレリーの「内的言語」「内的対話」と夢の問題の 関連については、拙稿 B16° 下を参照。

付 1. CHRONOLOGIE

- 1941 : naissance de Julia Kristeva à Sofia (Bulgarie).
- 1966 : se fixe à Paris et prépare la thèse de troisième cycle à l'École pratique des Hautes Etudes (direction d'études par Lucien Goldmann, conseils de Roland Barthes et de Jean Dubois).
- 1967 : achève la thèse sur "Jehan de Saintré" d'Antoine de La Sale: "Le Texte du Roman, approche sémiologique d'une structure discursive transformationnelle".
attachée de recherche au C.N.R.S. (date à vérifier).
- 1968 : contribution de deux articles sur la sémiotique (littéraire) à la *Théorie d'ensemble* du groupe "Tel Quel" (Seuil).
"Sémiologie et grammatologie" (entretien avec Jacques Derrida), in *Informations des Sciences humaines*, juin 1968, repris in J. Derrida, *Positions*, Minuit, 1972.
- 1969 : *Sémiotikè, Recherches pour une sémanalyse*, Seuil
chargée de cours à l'Université Paris VII (Jussieu), U. E. R.
"Science de textes et documents" (date à vérifier).
- 1970 : préface à la traduction française de Mikhail Bakhtine: *La Poétique de Dostoïevski*, Seuil.
Le Texte du Roman, La Haye, Mouton.
- 1971 : prise en charge du numéro 24 de la revue *Langages* consacré à l'"Epistémologie de la linguistique", Hommage à E. Benveniste.
- 1972 : "Sémanalyse et production de sens" (approche sémiotique d'*Un coup de dès* de Mallarmé), in *Essais de sémiotique poétique*, édité par A.J. Greimas, Larousse.
- 1972-73 : rédige la thèse de doctorat d'Etat: "Révolution du langage poétique, l'avant-garde à la fin du XIX^e siècle: Lautréamont et Mallarmé".
- 1973 : "Le sujet en procès" et "L'expérience et la pratique", respectivement in *Artaud* et in *Bataille*, actes du colloque de Cerisy-La-Salle de 1972, 10/18.

chapitre de "Sémiotique" du *Panorama des Sciences humaines*, sous la direction de Denis Hollier, Gallimard.

- 1974 : article de "Sémiologie" de l'*Encyclopaedia Universalis*.
publication de *La Révolution du langage poétique* (Seuil) et soutenance de thèse devant le jury composé de Henri Lefèbvre, Roland Barthes, Pierre Albouy, Jean Dubois et un autre non identifié.
promue maître de conférences à Paris VII (date à vérifier).
Les Chinoises, éd. des Femmes.
"Sujet dans le langage et pratique politique", in *Psychanalyse et Politique*, Seuil.
"Economie et politique du langage poétique" (entretien avec J.L. Houdebine), in *Promesse*, 36-37.
- 1975 : "Pratique signifiante et mode de production" et autre, in *La Traversée des signes* (ouvrage collectif), Seuil.
- 1977 : *Polylogue*, Seuil.
- 1978 : réédition de *Séméiotikè* (extraits) dans la coll. "Points", Seuil.
s'engage dans la cure psychanalytique à domicile et à l'Hôpital de la Cité Universitaire de Paris (renseignement fourni par E. Komatsu).
- 1979 : *Folle vérité* (ouvrage collectif), Seuil.
- 1980 : *Pouvoirs de l'horreur*, Seuil.
- 1981 : *Le langage, cet inconnu. Une initiation à la linguistique*, Seuil.

Pour une vue synthétique de la théorie de Kristeva au stade de *Séméiotikè*, on consultera utilement :

- articles de "Texte" et de "Sémiotique" par François Wahl dans l'Appendice de Ducrot-Todorov : *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Seuil, 1972. 滝田文彦他訳「言語理論小事典」, 朝日出版社, 1975.
- article de "Texte (théorie du)" par Roland Barthes de l'*Encyclopaedia Universalis*, 1973. 花輪光訳「テキスト」, 青土社「現代思想」, 1981/7.

Sont traduits en japonais :

- 1° "L'éthique de la linguistique" (in *Polylogue*), 小松英輔訳「言語学の倫理性」, 大修館「言語」, 1976/2.
- 2° "D'une identité l'autre" (*ibid.*), 小松英輔訳「『詩的言語』の主体」, 「現代思想」, 1978/10 臨増号.
- 3° *Les Chinoises*, 枝川昌雄訳 (部分訳), 岩波「思想」, 1979/4.
- 4° "La fonction prédicative et le sujet parlant" (in *Polylogue*), 久米博訳「述語機能と語る主体」, 「現代思想」, 1979/4+5.

- 5° “Comment parler à la littérature” (sur Barthes, *ibid.*), 小松英輔訳「いかにして文学に語るか」, 「現代思想」, 1980/6+7.
- 6° “Du sujet en linguistique” (*ibid.*), 小松英輔訳「言語学の主体について」, 「現代思想」, 1980/10.
- 7° 「鏡像段階と記号象徴の成立」 (*La Révolution du langage poétique* 第一部第一章部分), 三浦信孝訳, 「現代思想」, 1981/7 臨増号.

付 2. TERMINOLOGIE

Au stade de *Séméiotikè* (1969) :

- 1° sémiotique : 記号論 (sémiologie 記号学なる語はほとんど使われない)
- 2° sémanalyse : 記号分析学 (コミュニケーションの記号学に対立し, 記号そのものの批判・解体・死を含意)
- 3° pratique signifiante : 意味形成的実践または記号生産的実践
- 4° productivité : 生産性 (伝達と交換のための signe に対立する texte の意味生産性)
- 5° signifiante : 意味生産性または意味形成性 (processus de production de sens)
Cf. lettre (Lacan) 文字; double signifiante (Benveniste) 15° cf (a) を見よ
- 6° procès de signifiante : 記号生産あるいは意味形成の (弁証法的) 過程
- 7° géno-texte/phéno-texte : 生成としてのテキスト/現象としてのテキスト
Cf. Chomsky, structure profonde/structure de surface : 深層構造/表層構造
- 8° translinguistique : 超言語学 (ただし trans- は「超」と「横断」の意を合わせもつ)
- 9° différentielle signifiante : 記号生産的示差素 (signifiant と signifié が分化する以前の書記上音声上の最小単位, 固定的 sème より小さく texte 生成を動的に貫ぬく)
- 10° infinité potentielle : (詩的言語における意味論コードの) 潜在的無限性 (集合論の用語)
- 11° paragrammatisme : パラグラム原理 (Saussure の anagramme をテキスト生成の原理にまで拡張したもの. パラグラムは signe の線状性を垂直に切り開き, signifiant のヴォリュームを回復, 言語の中に異質な言語組成をつくりだす)
- 12° sujet zérologique : 空論的主体 (仏教の菩薩を論理的に定式化, タルトゥの L, メルの概念)
- 13° monologisme/dialogisme : 独話的単数論理/対話的雙数論理 (バフチーン の概念に由来)
- 14° intertextualité : 相互テキスト性またはテキスト相互関連性 (「すべてのテキストは他のテキストの吸収と変形である」テキストを社会と歴史のコンテクストに結びつける重要概念)

Au stade de *La Révolution du langage poétique* (1974) :

15° le sémiotique/le symbolique : 原記号作用/記号象徴秩序 (ル・サンボリックは記号の体系たる langue と語る主体による langue の意味論化たる énonciation を含む記号表象秩序, ル・セミオティックは signe 以前の, 欲動的の身体に根ざした記号生成の動性)

Cf. (a) Benveniste, le sémiotique/le sémantique : 記号論的水準/意味論的水準 (langue と énonciation の二重性, とともにクリステヴァのル・サンボリックに属す)

Cf. (b) Lacan, le réel/l'imaginaire/le symbolique : 現実界/想像界/象徴界 (それぞれ Freud のエス/自我/超自我, 母/子/父に相当, 第三項がル・サンボリックに重なる)

16° sujet en procès : 弁証法的主体 (ル・セミオティックとル・サンボリックの弁証法的過程にある主体, 「告発された主体」の意もあり)

Cf. cogito cartésien, égo transcendantal (Husserl), sujet parlant (Saussure) : デカルト的コギト, 超越論的自我, 語る主体,

17° chora sémiotique : 原記号的コーラ, 原記号的欲動場 (Platon の「ティマイオス」から借用, chora pulsionnelle, chora maternelle の用例もあり, Freud のエス=欲動=母に結びつく)

18° corps pulsionnel : 欲動的の身体 (chaine signifiante に浸透しようとする)

19° négativité/positivité : (無意識的欲動のもつ) 否定性/(定立的意識の) 措定性

20° rejet : 放擲, 棄却 (Freud の Verwerfung. 「快感原則の彼岸」で語られる Fort-Da あそびで幼児が糸巻きを放り投げる rejeter 動作を参照, 象徴作用の底にはたらく死の欲動の放擲をいう. ル・サンボリックの定立の裏に rejet がある)

21° dénégation : 否定 (Freud の Verneinung. 抑圧している欲望を否定的に言表することで, 欲望の一部を記号象徴秩序に取りこむが, 抑圧のメカニズムは相変わらずつく)

22° phase thétique, coupure thétique : 定立的段階, 定立的切断 (原記号コーラの抑圧・切断によって母体から分離され, signe と同時に sujet を定立する段階, Lacan の鏡像段階 stade du miroir から去勢 castration の発見を経て象徴秩序内に主体が定立される)

23° holophrastique : 完語文 (幼児が最初に話す一語で完全な文をなす言表, ル・セミオティックからル・サンボリックへの移行段階)

24° prédication : 述語機能, 主述定立 (主語に述語づけをして文を構成する述語機能は, 定立的主体を前提する)

25° fraying et stase : 疎通と圧窄 (欲動エネルギーの原記号作用が心身相関的回路を通して記号象徴秩序に還流することが fraying, 逆にこの回路が閉ざされ欲動エネルギーが圧窄されることが stase)

26° jouissance : 快楽 (原記号コーラがル・サンボリックの掟を破って象徴秩序内に噴出するとき味わわれる. 近親相姦の禁止への侵犯行為, バルトの plaisir

に対応する)

- 27° *dispositif sémiotique* : 記号論的装置 (記号象徴秩序の定立なしには原記号作用の否定性は機能しえない。音声的・語彙的・統辞的・修辭的変形を通してル・セミオティックをル・サンボリック内に再配置する *texte* 装置)
- 28° *bases pulsionnelles de la phonation* : 発声行為の欲動的基盤 (構造主義的音韻論では捉えられぬ音声の欲動価を解明した I. Fonagy の音声学理論, 言語記号の恣意性に対する重要な挑戦)
- 29° *transposition/condensation/déplacement* : 転位/圧縮/移動 (原記号欲動を記号象徴秩序に転換するメカニズムは, 夢の潜在思想を顕在内容に形象化する夢の作業 *Traumarbeit* と同一である。その基本的プロセスとして Freud は *Verdichtung* 圧縮と *Verschiebung* 移動をあげた。Lacan はこれを Jakobson の *métaphore* 隠喩と *métonymie* 喚喩に結びつけた)
- 30° *hétérogène* : 異質的なもの (monologique で monothéique なるル・サンボリックの秩序とは全く異質な矛盾のうずまくル・セミオティックの反構造性)

付 3. 邦 語 文 献

A. 直接クリステヴァを扱った研究・紹介

- 1° 原田邦夫「テキスト/トランスラングイスティック」, 名古屋文学部研究論集, LXIV, 1975/3.
- 2° 宇波 彰「〈語る主体〉とは何か」, 青土社「現代思想」1976/10. (「引用の想像力」, 冬樹社, 1979に再録)
- 3° 同 「無意識の〈語る主体〉」, 「現代思想」, 1977/5. (同上に再録)
- 4° 同 「マラルメの〈詩的言語〉」, 青土社「ユリイカ」, 1979/11.
- 5° 枝川昌雄「構造分析からテキスト分析へ——レヴィ=ストロースとクリステヴァの方法をめぐる——」, 神戸大学教養部「論集」19号, 1977/3.
- 6° 同 「『他なるものの論理』へ向けて」, 神戸大学総合雑誌「展望」, 24号, 1977春
- 7° 同 「クリステヴァにおける詩的言語論」, 岩波「思想」, 1979/4
- 8° 同 「クリステヴァと記号論」, 青山社「流域」1, 1979-80冬
- 9° 同 「クリステヴァの小説の記号論」, 神戸大学教養部「論集」, 27号, 1981/3.
- 10° 同 「精神分析と二つの記号論」, 「現代思想」, 1981/7 臨増号.
- 11° 山口昌男「女性の記号論的位相——クリステヴァ『中国婦女』をめぐる——」, 「思想」, 1979/4.
- 12° 西川直子「マラルメの読み直し」, 詩学社「詩学」全13回連載のうち, 第9回~第13回, 1979/9+10+12, 1980/1+3.
13. 同 「両義性をめぐって——マラルメ・デリダ・クリステヴァ」, 「ユリイカ」, 1979/11.
- 14° 小松英輔「否定性の思想——クリステヴァのノートから」, 「現代思想」, 1979/10 臨増号.
- 15° 同 現代思想の展望「クリステヴァ (1941-)」, 「現代思想」, 1979/12.

- 16° 石木隆治「Julia Kristeva 《Pouvoirs de l'horreur》」, 白水社「ふらんす」, 1980/8.
- 17° 三浦信孝「クリステヴァ記号論と精神分析学」, 「現代思想」, 1981/7 臨増号.
- B. クリステヴァに関連のある研究・intertextes
- 1° 菅野昭正「意味の織物——フィリップ・ソレルス論——」, 河出「文芸」, 1969/9.
- 2° 同 「『テル・ケル』と文学変革の論理——マラルメとの関連において——」, 「中央公論」, 1970/4.
- 3° 宇波 彰「現代言語論のひとつの方向」, 岩波講座「文学」3, 1976 (「引用の想像力」に再録).
- 4° 坂部 恵「意味と感覚の基層——ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』をめぐる」, 「現代思想」, 1976/10.
- 5° 豊崎光一「アナグラムと散種」, 朝日出版社「エピステーメー」, 1978/1.
- 6° 枝川昌雄「『bobéobi』の“意味”——フレーブニコフと詩的言語——」, 大阪大学仏文学会, GALLIA, XVIII, 1978.
- 7° 同 現代日本の思想「山口昌男——両義性の思考」, 「現代思想」, 1980/12.
- 8° 原田邦夫「引用——テキストのなかの／あいだのテキスト——」, 名古屋大学文学部仏文研究室, 「山川教授退官記念論集」, 1979/3.
- 9° 小松英輔「もう一人のソシュール I, II」, 「芸文研究」38号, 1979+39号, 1980.
- 10° 竹内信夫「マラルメ——『読むこと』への誘い」, 「ユリイカ」, 1979/11.
- 11° 同 訳・解説: アンリ・メシヨニック「詩の認識のために」, 思潮社「現代詩手帖」, 全11回連載, 1980/2~1981/2.
- 12° 若桑 毅「文学記号学のための覚え書き I, II」, 東京学芸大学紀要人文科学篇, 1980/2+1981/1.
- 13° 清水 徹「批評と文学研究Ⅲ——フォルマリズム志向」(特に第6節「ロラン・バルトとテルケル派」), 大修館・フランス文学講座6「批評」, 1980/9.
- 14° スタロビンスキー・工藤庸子訳「ソシュールのアナグラム・ノート」, 「現代思想」, 1980/10.
- 15° 三浦信孝「ソシュール・ヴァレリー・バンヴェニスト」, 「現代思想」, 1980/10.
- 16° 同 「夢の幾何学から夢の詩学へ」, 筑摩書房「ヴァレリー全集カイエ篇」月報2+3, 1980/8+10.
- 17° 丸山圭三郎「ソシュールの記号学と神話・アナグラム研究」, 日本記号学会編「記号学研究1」, 北斗出版, 1981/4.